領域横断的展覧会の試み
ーシャフハウゼン美術館の挑戦（2）ー実践

マルクス・シュテークマン

さて、それでは次に、シャフハウゼン美術館で実際に行われた二つの「領域横断的展覧会」についてお話ししましょう。

1.）『動物いっぱい』展、シャフハウゼン芸術協会、（1997年10月26日～1998年1月11日）

1.1.）現代美術の一主題

1990年代を通じて、動物の生態が、芸術の主題として取り沙汰されるようになってきました。古い主題が新たな状況の下で、再び活性化しています。多くの芸術作品が、人間と動物たちとの関係、例えば学術研究、畜産、家庭用ペットの問題、といった様々な観点から、特に倫理的な問いかけを伴って制作されています。ところで、かなり以前から、芸術家たちは、絵画、版画、彫刻、といった「古典的」ジャンルにとらわれた制作を捨て、無数の新しい素材による制作を続けています。従って私たちが企画したこの展覧会もまたあらゆる芸術ジャンルを採り上げることになりました。美術館の限られた予算と、限られた展示空間を考慮に入れて、私たちは、作品の出所をドイツとスイスに限定することにしました。

1.2.）シャフハウゼン、シュテムラー博物館

シャフハウゼンの毛皮加工職人で、自然保護にも深く関与していたカール・シュテムラー（1882年～1971年）は注目すべき人物でした。彼は何十年という歳月をかけてヨーロッパ内外の様々な動物学的資料を収集しました。それはとてつもないコレクションです。シュテムラーは動物の剥製職人としても知られていました。彼は剥製技術を刷新したのです。彼の膨大な剥製コレクションは、20世紀の十年代に始められました。そして、1960年代には、そのコレクションだけで充分博物館を満たすことができるようになったのです。

シュテムラー博物館は1970年に開設され、シャフハウゼン美術館に統合されました。このコレクションの目玉はなんと言っても人の手によって彩色されたジオラマで、これは60年代特有の白色蛍光灯に照らされています。これに加えて膨大な量の剥製と、陳列ケースが各階に所狭しと並べられています。この博物館の内部は、照明、陳列棚の位置に至るまで、設立以来一

切の変更を加えられていないため、まるで時間が止まってしまったかのような奇妙な印象を訪れるものに与えます。まさに博物館「の中の」博物館です。私たちが企画した展覧会に作品を出品してくれることになっていた芸術家たちはこの博物館にたいそう魅力を感じていました。三人の出品者、ハラルド・フックス、カンディダ・ヘーファー、レミー・マルコヴイッチュは、動物の剥製、それの置かれたシュテムラー博物館、そしてカール・シュテムラーその人との密接な関連の中にその作品を組み込もうと考えたのです。

1.3.）芸術と博物学の交差点

この展覧会のタイトルは『動物いっぱい』と名付けられました（図1,2）。この展覧会のコンセプトはシュテムラー博物館の剥製コレクションの中からいくつかの興味深いものを取り出し、それを現代の美術作品と同じ空間に展示する、というものでした。カール・シュテムラーはシャフハウゼンの誇りでしたから、シュテムラー博物館はシャフハウゼンを越えてよく知られていました。しかし、そのコレクションである動物の剥製はこの展覧会で初めてガラス製の陳列ケースから取り出され、外の世界と直接関わることになったのです。これらの剥製は、私が作った大まかなレイアウトに従って配置された台座の上に、それぞれ一つずつ置かれました。もっとも低い台座は、もっとも大きな剥製を見せられるよう、中央に向かって勾配をつけながら高くなってゆく地面の縁に配置されました。作品保護のため赤いロープが台座群を取り囲んでいます。こうして美術協会の貸しスペースの中央に、この展覧会の核心である動物の剥製が配置されることになりました。どのようにすればもっとも効果的にこの展覧会のテーマを見る人に理解させることができるだろうか、と私は思案を重ね、このような配置を思いつくに至ったのです。そのためには剥製たちをガラスケースから開放してやることがどうしても必要でした。こうして展覧会場と剥製は直接的な交渉を開始したのです。効果は絶大でした。というのも、特に注意深く選ばれた光の演出で、動物たちは暖かく照らし出され、まるで生きているかのような印象を見るものに与えたからです。殆どの剥製は、そのガラスでできた光沢のある眼球が直接観客の目に飛び込むよう、見るものの目線と同じ位置に置かれました。剥製にされた動物たちの中へと視線を泳がせている内、観客は壁に掛けられた奇妙なものに出会います。言うまでもなくこの展覧会のために制作された現代の美術作品です。美術作品の配置と、空間の中に配置された剥製との位置関係が変わることで、展覧会自体の意味も変わってしまうと考えた私は、その配置を考え、何度もそれらの位置を変えなければなりませんでした。見るものの関心を可能な限り強く引きつけるために、そして美術作品と動物との緊張感に満ちた相互関係を演出することが私の関心の焦点だったのです。

1.4.) 出品作品

この展覧会に出品してもらう作品を選択する際、まずはその制作に於いて集中的に動物をテーマとした作品を作り続けてきた作家たちのものを選ぼうと考えました。その際、私が試みたのは、それぞれの作家が互いに異なる視点を持っている、という条件を設定することでした。この展覧会を訪れた人が現代美術の多様性をも理解できるようにするためです。以下にこの展覧会に出品してくれた作家の作品をご紹介しましょう。

ヨハネス・ブルスはその彫刻作品と写真で、ある種の動物の、魔術的で、暗い側面を探求しようと試みています。彼の動物写真は大きなサイズで、技術的な介入、即ち写真に絵の具の上塗りを施すことで、絵画作品のような印象を与えます。これは写真を媒体とした絵画作品と言うべきものでしょう。写真は絵画と違って、きわめて即物的なリアリティーを持っています。もし同じテーマを絵画作品で表現したとすれば、新鮮さと信憑性が随分損なわれてしまったことでしょう。

バルタザール・ブルクハルトは動物園の動物を大きなモノクロームの写真で表現しました。こうすることでまるで人間のような表情が獲得されています。彼の動物園の動物を撮った一連の写真には密やかなユーモアが流れています。あたかも人間を撮影するようにして撮られた、生真面目で、内に情熱を秘めた動物たちは、しかし実はこっそりと笑っているようにも見えます。人の目にさらされているのが日常の彼らなのにです。

マリー・ホセ・ブルギはそのヴィデオ作品で、人に飼われている動物たちの現実を主題化しました。彼女の他の作品でもしばしばうまくいっているように、ここでも、殆ど危険といってもいいような劣悪な環境にペットたちが置かれていることを見るものに強く印象づけます。彼女はそのヴィデオ作品に何ら告発の調子を与えていないのですが、にもかかわらずそこに提示されている主題は見るものに重くのしかかります。この展覧会で私は彼女のヴィデオによるインスタレーションを版画室の狭い空間に置きました。こうして鑑賞者はまるで自分自身が鳥かごの中にいるかのような錯覚を覚えることになりました。

ハラルド・フックスは規模の大きなインスタレーションで、自然科学、魔術、そして芸術の間に広がる世界を表現しました。私たちの展覧会のために、彼はカール・シュテムラーの剥製や、その人間性を深く研究した、新しいインスタレーションを制作しました。自然科学の実験室のような印象を与える彼のインスタレーションの秘密めいた雰囲気は、鑑賞者に、自身が恰も囚われの身になったかのような錯覚を与えます。説教臭さを一切感じさせることなく、フックスは、遺伝子研究の危険性に言及しているのです。

トーマス・グリュンフェルトは巨大なカンヴァスに、剥製に使われているようなガラスで出来た動物の義眼を取り付けました。輝くカンヴァスから出し抜けに問いかけるような動物の目が浮かび上がります。目は大きさ、色、形がそれぞれにかなり違っています。こうして私たちはその目から、既に知っている、あるいはまた未知の動物を思い浮かべます。シャフハウゼン美術館自然史部門の学芸員、マルクス・フーバーはこれらの目がどういう動物のものなのか殆ど100パーセント言い当てることが出来ました。同じガラス製の義眼を持った動物の剥製たちとグリュンフェルトの作品が並んで置かれることで、きわめて印象的な対話が生まれます。

ルート・ヒンメルスバッハは旧ユーゴスラヴィアにおける戦争の途轍もない恐怖にインスパイアされた400頭の犬の顔を私たちに見せつけます。それらはまるでデスマスクのようです。粘土で作られたこれらのオブジェは長く連なるように配置されています。それぞれのポートレートはそれぞれに違った感情表現を与えられています。犬たちは友好的な、あるいは愛らしい、あるいは眠そうな、あるいは威嚇するような、あるいは怒っているような表情を浮かべています。このような感情表現の多様性が彼女の仕事を特徴付け、そしてその作品を魅力あるものにしています。人間の多様な感情表現がユーモアたっぷりに引用される一方、動物特有の気ままさ、不可解さが視覚化されることで、彼女の作品は不思議な多犠牲を獲得しています。

カンディダ・ヘーファーは幾つもの自然史博物館を撮った一連の写真を提供してくれました。動物たちにとって、剥製にされたとはいえ、博物館という建物は全く異質な場所ですが、これが彼女の作品に重要な役割を演じています。彼女はシュテムラー博物館の剥製を印象的に浮かび上がらせるにはどうすればいいのかを考えるために、制作に先んじてシャフハウゼンにわざわざやってきました。こうして、彼女はこの博物館の奇妙な雰囲気を申し分のない形で作品化することが出来たのです。彼女はこの内の一枚を先に言及した自然史博物館シリーズの一枚に加えたのです。

レミー・マルコヴィッチュは相当な資金と大がかりなテクニックを駆使して、私たちの展覧会のために一点の「ヴィデオ彫刻」を作りました。見終わるのに60分を要するヴィデオは、延々と、レントゲンカメラで撮影したシュテムラー博物館の動物剥製の透視映像を流し続けます。その際、マルコヴィッチュは、ちょうど空港での荷物検査の際に荷物を投射する機械のような、半円筒形の透視機械を用意しました。ヴィデオに映し出される剥製の色は空港の透視機械によって得られるものと全く同じものです。青は金属を、オレンジは有機物を、緑は半有機的物質を意味します。突然、単なる動物の保存技術が、科学的調査の学術的意味を獲得します。初めて、剥製技術の見事な成果が明らかにされ、当時の剥製作業がどのような材料によって行われたのかが解るようになりました。彼の作品は芸術と自然史研究の実りある交流を理想的な形で視覚化したものなのです。

ミヒャエル・ファン・オーフェンはこの展覧会で、唯一19世紀的な意味で絵画と呼べる作品を提出した作家です。彼の作品は具象的対象と非具象の間の見事な緊張関係を見るものに提供してくれます。少数の色彩だけによって制作された彼の作品は全くの抽象絵画から一羽の鳥が飛び立ち、しかしその一瞬後には再び色彩とテクスチュアの抽象的世界へと還って行くようなヴィジョンを生み出しています。特殊な技法によって、彼の描く動物は、多くの伝統的な動物画と違って、永遠の相の下に、不動の存在性を声高に語ることをやめたのです。

ノート・ヴィタルはブロンズ製の羊の舌をモティーフにしたインスタレーションを提出してくれました。作品は展覧会会場の壁に取り付けられました。彼は、思いつく限りのありとあらゆる種類の精肉を扱うニューヨークの精肉市場で、冷凍にされた動物の舌を見つけました。展覧会では舌だけが展示されています。それは元は特定の動物の一部だったものです。これは動物の動物たるゆえんを強制的に無効化するものです。「一部は全体のために」というラテン語の言い回しがあります。こうして私たちは羊の一部から羊の全体を想起し始めます。すると、それぞれの舌が、それぞれのかけがえのない一頭の羊であったことに気づくのです。これは動物の個性への問いかけです。ところで動物の個性とは、舌の筋肉が成長してできあがるような、単純なものなのでしょうか？

1.5.）展覧会関連の催し

この展覧会に示された「領域横断的」展覧会の理念について、私は二人の作家に作品の朗読をお願いしました。一人はスイスの著名な作家フーゴー・レッチャーです。彼は、動物に関するユーモアたっぷりの、劇画化された自作のテクストの一部を朗読してくれました。レッチャーはその動物の寓話で、この社会の否定的側面を批判しています。もう一人はドイツの抒情詩人トーマス・クリングです。彼は別の仕方で、展覧会に寄与してくれました。彼は実験的な作品で広く知られています。彼の作品には繰り返し動物が登場します。そこには、人間の、実存的精神状態が反映されています。彼の作品の特徴は、言語特有の発見に満ちあふれていることですが、またあらゆる感情的な領域を探査する、表現的で、暗示的な表象能力の点でも際だっています。この二人の作家の朗読によって、展覧会は、この二人の朗読を目当てにやってきた聴衆をも、展覧会の観客として取り込むことが出来ました。なぜなら朗読は展覧会場の真ん中で行われたからです。聴衆は静かに佇立する、あるいは壁に掛かった動物たちと対面しながら朗読を聞いていていました。

2.）『花』展、シャフハウゼン芸術協会、（2000年5月27日～7月30日）

2000年、私は「花」という作業タイトルで、「領域横断的」展覧会を開催しようと考えてい

ます。これは『動物いっぱい』展を補完するものです。この展覧会はタイトルが既に申し分なく示しているように、花と植物を主題とするものです。この展覧会は2000年の５月に開幕するわけですから、言うまでもなく展覧会の詳細は、まだ決定していません。しかし既にこのプロジェクトは動き始めており、従ってここで皆さんに、いくつかの事柄についてお話しできる、と考えています。(図３,４　図版は本稿の為に後日送られてきた同展の実際の展示風景である：訳者註)

2.1.) 現代美術の一テーマ

現代美術の分野では、ここ数年、花、あるいは植物をテーマにした作品が目立つようになってきました。今年、バーゼルで開かれた国際美術展『アート』では花をモティーフにした作品が目立って多く、訪れる人の目を引いていました。その中では写真作品が優勢を占め、素描や絵画作品はその後塵を拝する形となっていました。ここでその一部を紹介しておきましょう。

荒木経惟は花をモティーフにした作品において群を抜いたアーティストでしょう。大都市の日常を撮った彼の作品についてはみなさんの方がよくご存じでしょう。彼の花の写真は、感覚に直接突き刺さるような力強さと、エロティックなほのめかしに特徴があります。

ダーフィット・フィッシュリとダーフィット・ヴァイスは国際的に名の知れたスイスのアーティストです。彼らの作品は、写真、彫刻、インスタレーション、ヴィデオ・アートと多岐に亘っています。彼らの新しい花の写真は、コンピュータによる合成ではなく、スライドの重ね合わせによって作られたものです。これらの何ともきれいで、華やかな花の写真群は、彼らの誘惑的な感受性によって、私たちを魅了します。その作品は芸術とキッチュ（まがい物）の間に絶妙なバランスをとって狭い、しかし興味深い一本の橋を架けています。

ディター・クリークはドイツの現代美術作家としては最も名の知れた一人です。彼のきわめて激しい、サイズの大きな作品は、尋常でない厚みを持った絵の具層によって際立っています。絵の具は何センチもの厚みを持っています。この厚く塗られた画面は、作家の内面の吐露と受け取ってよいでしょう。これはドイツ表現主義の伝統に連なるものです。ここでは主題と、作品の様式特徴が一つになって、お互いを強く規定しています。

ヴォルフガンク・ライプは信じられない根気強さで、花粉を集め、展覧会場の床にまき散らしました。それは見事なものでした。花粉たちは印象的で、クールな輝きを展覧会場に与えていました。この作品は独創的で、殆ど瞑想的ともいえる形で、「花」というテーマと取り組むものでした。

レミー・マルコヴィッチュは私の企画した『動物いっぱい』展の参加者でもありますが、彼は花々を重層的に写し込んだ写真作品を提出していました。それらは何か魔法にかけられたような不思議な作品でした。それはまるで万華鏡のような作品でしたが、感覚的なエネルギーを放出するものでした。

イーヴ・ネッツハンマーは若い世代のアーティストです。彼は1970年シャフハウゼンに生まれています。有力なコンクールでも賞を取っています。このコンクールは私が今年の春シャフハウゼン美術館で企画したものです。ネッツハンマーは彼の作品をコンピュータで制作しています。これにちょっとした手を加えて、意外な効果を作品にもたらしていました。

ペーター・レーゼルは、花をテーマに、三次元的な作品を制作する数少ないアーティストの一人です。彼のアイロニカルなインスタレーションや彫刻作品はドイツの警察官の着る制服を身につけています。

トーマス・シュトゥルートは、ベルントとヒーラ・ベッヒャーによって指導される、所謂デュッセルドルフ派の中でも最も有名な写真家の一人です。彼の作品は、感覚的な軽快さを通して、暗示的で魅惑的な花の姿を捉えています。

さて、以上見て来たように、花、ないし植物というテーマは今日の美術において様々な可能性を試みられ、豊かな成果をもたらすものです。このテーマに、私はなおいくつかの関連するテーマを付け加えたいと思っています。例えば、庭、というテーマですが、これは現代美術にとって重要な意味を持っています。美術評論家のパオロ・ビアンキが、『クンストフォーラム・インターナショナル』という美術雑誌の中で、このテーマにふれています。一方、花、というテーマは、言うまでもないことですが、自然、というテーマと深く関わるものです。というわけで、花というテーマは、多くの関連するテーマとあまりにも簡単に結びついてしまうので、よほど注意深く、そのコンセプトを練り上げなければならないでしょう。従って花、というテーマを設定するにあたって、地域的な限定を加えることは有効なものでしょう。資金的な問題も含めて、私は来るべきこの展覧会をスイスとドイツの作品に限定するつもりでいます。

2.2.) 展覧会の目標

展覧会の目標とはそもそもなんでしょうか。この問いについて、シャフハウゼン美術館における「領域横断的」展覧会という、特殊なケースから考えてみましょう。『動物いっぱい』展と同様、『花と植物』展もまた通常の展覧会におけるよりも多彩な観客層を期待しています。一般的に言って、花というテーマはきわめて近づきやすいものです。ですから、現代美術へと、

一般の人を導いていくには格好のテーマといえるでしょう。『動物いっぱい』展で大いに活用されたシャフハウゼン美術館の自然史部門が再び大きな役割を担うことになるでしょう。

シャフハウゼン美術館は、19世紀初頭にさかのぼる、膨大な量の植物標本をコレクションしています。『動物いっぱい』展に一人の剥製コレクターが登場したように、ここでも何人かのコレクターの辛抱強い収集活動が大きな役割を演じています。例えば、コンラート・ラフォン（1801－1882）は19世紀中頃までにこのコレクションの基礎を作った人として知られています。しかしこのコレクションを、今日あるような形へと纏めていったのは、ゲオルク・クンマー（1885－1954）という人物です。彼は、今世紀前半、シャフハウゼンの位置する地域の植物のサンプルを細大漏らさず収集し、数冊に及ぶ専門的な植物図譜を出版しています。そのほかにも何人もの、教師、薬剤師、自然化学者らがこのコレクションに大きく寄与しています。

私は、このコレクションの中から、来るべき展覧会のためにいくつかのものを選ぶことになるでしょう。特に絶滅種や、絶滅を危惧されているもの、あるいは、途轍もなく美しいものを選ぶことになるでしょう。こうして私は、社会が自然と如何に関わって行くべきか、そしてその際、芸術には何が出来るのか、といった問題を扱うことになるでしょう。数年前まで、花というモティーフは、現代芸術に相応しいものではない、と考えられていました。なぜならそれはキッチュ、即ちまがい物めいてしまうからです。この「リスクの大きな」モティーフを新たな視点からとらえなおし、その美しさや装飾性を発見することに、ここ数年の現代美術は大きな関心を払ってきたといえるでしょう。かつては花をモティーフとすると、殆ど必ずと言っていい形で生と死、という途轍もなく重いテーマが浮かび上がってきてしまいましたが、現在ではそのようなことが問題となることはまずないと言っていいでしょう。来るべき展覧会では、このような古いテーマをなぞるようなことだけはしないつもりです。また当然のことながら、このテーマを巡って全世界で行われている様々な試みをすべて採り上げることも不可能です。また、ただ単に植物を描いた作品も取り上げるつもりはありません。私にとって、興味深いのは、花の持つ「美」、「官能性」、そして「退廃の香り」です。また特に重要だと思われるのはこのテーマの持つ倫理的な側面です。例えば「遺伝子組み替え」の問題、あるいは「自然保護」との関連性です。いずれにせよ、現代美術における花というテーマは、「美」という、美術作品において今ではあまり問題にされなくなってしまった特性に改めて気づかせてくれる点で、きわめて重要なものといわざるを得ません。

この展覧会では、自然史部門の他、シャフハウゼン美術館が持つ他のすべての部門をも巻き込もうと考えています。どうすればこの希望をより良い形でかなえることが出来るか、についてはまだ考えがまとまっていません。展覧会ではシャフハウゼン美術館が立つ旧修道院の敷地内にある庭園を自由に使っていいということになっているので、これを利用しようと考えてい

ます。特に、中世から大切に維持されてきた薬草のための庭は使える、と思っています。この庭には、かつて修道士たちが実際に服用していた、珍しい薬草が今でも見られます。新たに植物を植えるためにお金をかけなくとも、この庭にある植物のいくつかに、展覧会に関するテクストを書いたカードをつけておけば、それでその植物は展覧会への出品作、となるわけです。いずれにせよ、こうすることで、展覧会場を訪れた人は、屋内での作品鑑賞に疲れた時、屋外に出て気分を一新できるばかりでなく、美術館が既に持っている様々なものに改めて気づき、全く新しい視点から捉えなおす可能性に目を見張るかも知れないのです。

さて、以上で、私の講演を終えることにします。私のお話がみなさんを現代美術をテーマとした展覧会の面白さに向けることが出来たとしたら、大変うれしく思います。ご質問には喜んでお答えします。ご静聴ありがとうございました。

図１　『動物いっぱい』展　シャフハウゼン芸術協会　1997年

図２　『動物いっぱい』展　シャフハウゼン芸術協会　1997年

図３　『花』展　シャフハウゼン芸術協会　2000年

図４　『花』展　シャフハウゼン芸術協会　2000年

Dr. Markus Stegmann
Vortragsreihe "Museologie", Beppu University, 25./26. November 1999

Interdisziplinäre Ausstellungsprojekte am Museum zu Allerheiligen Schaffhausen

Teil I Theorie

Ausgehend von zwei allgemeinen Beobachtungen zur Situation der Ausstellungsarbeit zeitgenössischer Kunst gelange ich zu acht Thesen interdisziplinärer Ausstellungsprojekte, wie ich sie am Beispiel von "Animaux et animaux" (1997/98) und "Fleurs" (2000) am Museum zu Allerheiligen Schaffhausen durchgeführt habe.

I.) In den neunziger Jahren begegnet ein Paradox: Die Anzahl der Ausstellungen stieg beträchtlich an, während gleichzeitig das Publikumsinteresse kontinuierlich nachliess.

II.) Im Zuge allgemeiner Globalisierung findet man zunehmend an den verschiedensten Orten die immer selben Künstlernamen und -positionen.

Acht Thesen interdisziplinärer Ausstellungsarbeit:

1.) Analyse der Museumsstrukturen, vorhandene Sammlungen stellen natürliche Resourcen dar.

2.) Dialoge herstellen zwischen den ortsspezifischen (naturkundlichen) Sammlungen und den Kunstwerken, die von aussen in die Ausstellung gelangen.

3.) Diese Dialoge bewirken die Einmaligkeit der Ausstellung und wirken der verbreiteten Austauschbarkeit entgegen.

4.) Die naturkundlichen Objekte sowie eine geschickte, pointierte Inszenierung ermöglichen dem Publikum eine besonders sinnliche, kontrastreiche Wahrnehmung.

5.) Durch die Präsenz der naturkundlichen Objekte können bestehende Hemmschwellen beim Publikum abgebaut werden.

6.) Gleichzeitig bewirken sie ein grösseres Publikumsspektrum und höhere Besucherzahlen.

7.) Da die Museumsobjekte als Sympathieträger auftreten, können auch experimentelle, unabgesicherte Kunstwerke in die Ausstellung einbezogen werden.

8.) Dem Publikum werden wertvolle grenzüberschreitende Wahrnehmungsweisen angeboten.

Teil II Praxis

1.) "Animaux et animaux - Zeitgenössische Kunst und Zoologie" (1997/98)

Die interdisziplinäre Ausstellung "Animaux et animaux" thematisierte das Verhältnis der zeitgenössischen Kunst zur Zoologie (vgl, Abb. Nr. 1, 2) Alte Tierpräparate aus der ersten Hälfte des 20. Jahrhunderts aus der Sammlung von Carl Stemmler (Schaffhausen) standen ausgewählten Werken der Gegenwartskunst gegenüber. Die Tierpräparate wurden ohne Glasabdeckung auf einer grossen "Sockellandschaft" in der Mitte des Ausstellungssaals präsentiert und konnten so einen unmittelbaren Dialog mit den Kunstwerken führen. An "Animaux et animaux" beteiligten sich zehn internationale Künstlerinnen und Künstler aus der Schweiz und Deutschland: Johannes Brus, Balthasar Burkhard, Marie José Burki, Harald Fuchs, Thomas Grünfeld, Rut Himmelsbach, Candida Höfer, Rémy Markowitsch, Michael van Ofen, Not Vital.

2.) "Fleurs - Blumen in der zeitgenössischen Kunst und Naturkunde" (2000)

Die gattungsübergreifende Ausstellung "Fleurs" beleuchtete das Spannungsfeld von bildender Kunst und Naturkunde (vgl, Abb. Nr. 3, 4). Im Zentrum des künstlerischen Interesses stehen Fragen nach der Schönheit. Aber auch ethische Reflexionen klingen in den Werken an hinsichtlich des gesellschaftlichen Umgangs mit Genforschung und Ökologie. Herbarien des 19. und frühen 20. Jahrhunderts aus der Naturkundeabteilung des Museums und die Werke der Gegenwartskunst traten in ein spannungsvolles Verhältnis. An "Fleurs" beteiligten sich zwölf internationale Künstlerinnen und Künstler aus der Schweiz, Deutschland und Japan: Nobuyoshi Araki, Silvia Bächli, Peter Fischli/David Weiss, Mireille Gros, Serge Hasenböhler, Jörg Lenzlinger/Gerda Steiner, Rémy Markowitsch, Irene Naef, Peter Rösel, Annelies Strba, herman de vries, Cécile Wick.

Teil II Praxis

2.) "Fleurs", Kunstverein Schaffhausen (28.5. - 30.7.2000)

Ähnlich wie "Animaux et animaux" thematisierte die interdisziplinäre Ausstellung "Fleurs - Zeitgenössische Kunst und Naturkunde" eine Facette des Verhältnisses von Gegenwartskunst und Natur (vgl, Abb. Nr. 3, 4).

2.1.) Ein Thema der Gegenwartskunst

Blumen und Blüten treten seit einigen Jahren als Motive der Gegenwartskunst in Erscheinung. Dabei zeigt sich die Fotografie als bevorzugtes künstlerisches Medium, mit Abstand gefolgt von den "klassischen" künstlerischen Gattungen Zeichnung und Malerei. Das Blumenthema mündet in verschiedene benachbarte Bereiche: So sind beispielsweise Gärten ein wichtiges Gebiet zeitgenössischer Kunst, das der Kunstkritiker Paolo Bianchi kürzlich in zwei Bänden der Kunstzeitschrift "Kunstforum International" aufgearbeitet hat. Blumen stehen andererseits für eine Auseinandersetzung der Kunst mit der Natur ganz allgemein. Damit stellt sich klar heraus: Das Thema musste fur die Ausstellung sorgfältig abgegrenzt werden, sonst hätte die Gefahr inhaltlicher Unschärfe bestanden. Neben der Einschränkung auf Blumen und Blüten diente eine geographische Abgrenzung: "Fleurs" konzentrierte sich im wesentlichen auf die Schweiz und Deutschland. Wie "Animaux et animaux" zielte "Fleurs" auf ein grösseres und breiteres Publikum. Über das Blumenmotiv sollte der Zugang zur zeitgenössischen Kunst geschaffen werden.

2.2.) Alte Schaffhauser Herbarien

Wiederum präsentierten wir interessante, ein wenig in Vergessenheit geratene naturkundliche Sammlungsbestände des Museums der Öffentlichkeit und versuchten, sie in einen inspirierenden Kontext zu stellen. Das Museum zu Allerheiligen besitzt grosse Bestände an Herbarien, deren Entstehung bis ins frühe 19. Jahrhundert zurückgeht. Schaffhauser Persönlichkeiten legten die Herbarien in mühevoller, jahrzehntelanger Kleinarbeit an. Zu erwähnen ist beispielsweise Johann Conrad Laffon (1801-1882), der die frühesten Herbarien Mitte des 19. Jahrhunderts zusammenstellte. Eine zentrale Rolle spielte ferner Georg Kummer (1885 - 1954), der

in der ersten Hälfte des 20. Jahrhunderts eine lückenlose Sämmlung sämtlicher Pflanzen der Region Schaffhausen anlegte und in einem mehrbändigen wissenschaftlichen Werk publizierte. Zahlreiche weitere Persönlichkeiten - ob Lehrer, Apotheker oder Naturwissenschaftler - wären noch zu erwähnen, was hier jedoch zu weit führen würde. In Zusammenarbeit mit Markus Huber, dem Konservator der Naturkundlichen Abteilung, zeigten wir das schier unerschöpfliche Material in einer exemplarischen Auswahl, insbesondere ausgestorbene, vom Aussterben bedrohte oder besonders schöne Arten. Die sich daran anschliessenden Fragen nach dem gesellschaftlichen Umgang mit der Natur stellten eine der vielen Überleitungen zur Kunst dar.

2.3.) Spartenübergreifende Aspekte

In der Kunst galten bis vor wenigen Jahren Blumen als "unmögliche" Motive, da zu nahe am Kitsch stehend. Dieses "belastete" Material erneut aufzugreifen und Aspekte der Schönheit und des Ornamentalen zu entdecken, scheint ein wichtiges Interesse der gegenwärtigen Kunst zu sein. Die überstrapazierte Symbolik von Leben und Tod, die sich typischerweise in Blumendarstellungen manifestiert, ist heute kein Hinderungsgrund mehr, sich mit Blumen und Blüten zu beschäftigen. Die Ausstellung konnte keinen repräsentativen Überblick über das Thema geben. Es ging mir auch nicht um Werke, die sich in reiner Naturillustration erschöpfen. Mich interessierten vielmehr die Aspekte von Schönheit, Sinnlichkeit und Dekadenz. Nicht zuletzt führen viele Werke auf ethische Fragen beispielsweise der Genforschung und des Naturschutzes zurück. Blumendarstellungen in der zeitgenössischen Kunst besitzen eine erfreulich unverkrampfte Ausstrahlung. Schönheit scheint wieder möglich zu sein.

Neben der Naturkundlichen Abteilung waren auch noch die Kunstabteilung, die Numismatik und die Historische Abteilung des Museums mit kleineren Beiträgen an der Ausstellung beteiligt: In einem Raum wurden ausgewählte Blumenbilder des 20. Jahrhunderts aus der Sammlung der Kunstabteilung gezeigt. Die Numismatik steuerte einige kostbare Münzen mit Blumendarstellungen bei und in der Historischen Abteilung konnten die Künstler Jörg Lenzlinger und Gerda Steiner eine faszinierende, zeitlich befristete Installation einrichten (vgl. Abb. Nr. 4). Ein Parcours führte die Besucher durch verschiedene Abteilungen des Museums und setzte sich im alten, zum Museumsareal gehörenden Kräutergarten fort, wo die Stadtgärtnerei Schaffhausen die

blühenden Heilpflanzen der Mönche des Mittelalters nach alter Überlieferung anbaut. Ohne dass mit grossem finanziellen Aufwand Neupflanzungen vorgenommen werden mussten, stellten Texttafeln Kräuter und Heilpflanzen vor. Nach dem Ausstellungsbesuch eine willkommene Abwechslung an der frischen Luft und ein Beispiel mehr, wie bereits im Museum vorhandene Dinge neu und inspirierend präsentiert werden können.

2.4.) Künstlerinnen und Künstler der Ausstellung

Bei der Auswahl habe ich Künstlerinnen und Künstler berücksichtigt, die sich bereits seit längerer Zeit mit Blumenmotiven beschäftigen. Im folgenden stelle ich Ihnen die Teilnehmerinnen und Teilnehmer von "Fleurs" vor.

Nobuyoshi Araki gehört zu den wichtigsten Künstlern, die sich Blumendarstellungen zuwenden. Seine Fotografien von grossstädtischen Alltagsszenen sind Ihnen sicherlich bestens bekannt. Seine Blumen faszinieren durch ihre sinnliche Ausstrahlung und ihre erotischen Konnotationen.

Silvia Bächli lässt in ihren grossformatigen, schwarz-weissen Zeichnungen filigrane Halme und Blüten entstehen, die sich lose zu einem magischen, zauberhaften Gespinst verflechten. Die Blumen der Künstlerin sind nicht als äussere Abbildungen, sondern im Gegenteil als "innere" Pflanzen zu betrachten, die in geheimnisvolle Innenwelten des subjektiven Empfindens führen. Silvia Bächli zählt zu den bekanntesten Zeichnerinnen der Schweiz.

Peter Fischli & David Weiss gelten als die international bekanntesten Schweizer Künstler der Gegenwart. Ihr Werk umfasst Fotografie, Skulptur, Installation und Videokunst. Ihre neuen Blumenfotografien entstehen nicht am Computer, sondern durch Überlagerungen von Dias. Diese wunderschönen, überreichen Blumendarstellungen betören und verführen durch ihre ansteckende Sinnlichkeit. Die Werke balancieren auf einem schmalen, aber sehr interessanten Grat zwischen Kunst und Kitsch.

Mireille Gros beschreibt in ihren kleinformatigen Zeichnungen - ähnlich wie Silvia Bächli - nicht die äussere Wirklichkeit, sondern die innere Natur der Pflanzen. Im Graphischen Kabinett des Museums habe ich ihre Blätter einem seltenen, kleinteiligen Moosherbar gegenüber gestellt, wodurch besonders intensive wechselseitige Bezüge entstanden. Die Künstlerin war begeistert und reagierte mit der Hängung ihrer Werke auf die kostbaren, zerbrechlichen Moose, deren Blüten sich nur bei genauem Hinsehen zu erkennen geben.

Serge Hasenböhler darf als "Geheimtip" der jungen Schweizer Fotografie gelten. Seine neuesten grossformatigen Fotografien besitzen eine faszinierende Leuchtkraft und eine fast hyperreale Brillanz. Unter Verwendung von künstlichen Blumen und Tierpräparaten erzeugt der Künstler eine magische Bildwirkung mit einer erstaunlichen Tiefenwirkung.

Jörg Lenzlinger und Gerda Steiner arbeiten ebenfalls mit künstlichen Blumen. In Schaffhausen schufen sie eigens für "Fleurs" eine Installation, die nach Ausstellungsende wieder abgebaut wurde (vgl, Abb. Nr. 4). In der Historischen Abteilung fanden die Künstler eine alte "Zerreissmaschine" des frühen 20. Jahrhunderts, die in Schaffhausen zur Erprobung der Stabilität von Metall eingesetzt wurde. Die Maschine wurde mit künstlichen Blumen vollständig verkleidet, wodurch in dem sehr nüchternen Ausstellungsraum der Industriegeschichte ein für die Besucher überraschendes, buntfarbiges Blühen stattfand, verstärkt durch künstlichen Duft.

Rémy Markowitsch, ein Teilnehmer der Ausstellung "Animaux et animaux", formuliert in seinen Fotografien Überlagerungen und Verdichtungen von Blüten. Wie bei einem Kaleidoskop steigert sich die sinnliche Energie. In der Ausstellung "Fleurs" waren grossformatige Fotografien zu sehen, die so etwas wie ein unkontrolliertes Wachstum der Pflanzen zum Ausdruck bringen. Assoziationen an genmanipulierte Pflanzen stellen sich ein.

Irene Naef zeigte Fotografien, die in Form von Leuchtkästen präsentiert wurden. Auf diese Weise hinterleuchtet, wirken sie besonders intensiv und glühend. Das massenhafte "Regnen" von Rosen in Innenräumen erzeugt eine surrealistische Atmosphäre von hoher sinnlicher Präsenz.

Peter Rösel gehört zu den wenigen Künstlern, die dreidimensionale Blumenwerke schaffen. Seine ironischen Installationen und Skulpturen sind gänzlich aus deutschen Polizeiuniformen geschneidert, wodurch sie einen hintergründigen Witz besitzen. In Schaffhausen platzierte ich den zweiteiligen "Löwenzahn" auf dem Fensterbrett einer Brücke, die zwischen zwei Gebäudeteilen des Museums und den beiden Ausstellungssälen vermittelt, so dass die Blumen erst auf den zweiten Blick ihren Kunstcharakter offenbarten.

Annelies Strba zählt zu den bekanntesten Fotografinnen der Schweizer Gegenwartskunst. Ihre überblendeten Blumenmotive, die gezielt die Unschärfe als bildnerisches Mittel einbeziehen, lassen eine verzauberte Atmosphäre entstehen. Ihre Fotografien wecken Erinnerungen an eine ferne Vergangenheit.

herman de vries gab uns genaue Anweisungen, ein grosses Lavendelfeld aus getrockneten Lavendelblüten einzurichten. In den Massen 4×4 Meter streuten wir einige Zentimeter dick Lavendelblüten auf den Boden. Im gesamten Ausstellungsraum verbreitete sich ein intensiver Lavendelduft, der alle Besucher gefangen nahm. herman de vries zählt zu den wichtigen europäischen Künstlern der "arte povera" der frühen siebziger Jahre.

Cécile Wick zeigte kleinformatige Fotografien, die auf dem Abklatsch eines sich entwickelnden (daher noch feuchten) Polaroids auf weichem Büttenpaier beruhen. Trotz des fotografischen Verfahrens handelt es sich um Unikate, eine technische Besonderheit. In ihrer künstlerischen Wirkung faszinieren die Arbeiten durch ihren sehr malerischen und zugleich fragmentarischen Charakter, der ihnen etwas Erinnerungshaftes verleiht.

ich hoffe, ich konnte Ihnen interessante Einblicke in die Ausstellungspraxis zeitgenössischer Kunst geben. Ich danke Ihnen für Ihre Aufmerksamkeit und stehe Ihnen für Frage gerne zur Verfügung.